

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
伊田 良種	男 性	84歳	18歳	富岡中部

① 8月15日は、どこでどんなことをしていましたか。

安城^{あんじょう}の軍需工場^{ぐんじゆ}（愛知航空機今村工場）で働いていた。

② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。

その工場内の放送で知った。

③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

飛行機を作る材料がだんだん少なくなっていたので、勝ち目はないと予感
 していた。アメリカの飛行機から終戦^よを呼びかけるビラもまかれていた
 ので、やっぱりかという感じだった。夜勤^{や きん}あけの帰りに新城駅に着くと、よく見かけ
 た将校^{しょうこう}が軍刀^{つえ}を杖^{すわ}にして力なく座り込んでいた。敗戦を実感させられた。

④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと

「月月火水木金金 ～ 白紙^{ちやうよう}の徴用^{ちやうよう}」

私は昭和18年9月21日、県知事名による第一次徴用^{ちやうよう}（白紙）*1で、愛知航
 空機に入社した。最初の1ヶ月は名古屋市港区の永徳工場^{えいとく}で研修した。当時、愛
 知航空機では毎月2,000人ずつ徴用工^{じゆうぎよういん}の受け入れと研修をしていて、永徳工
 場には数万人の従業員がいたといわれている。このころは、全工場が海軍の管理
 工場となっていて、海軍の飛行機を作っていた。

10月末に、愛知航空機熱田工場（従業員約2万人）に配属となったが、19
 年5月、工場疎開^{そかい}で安城にある愛知航空機今村工場に移った。そこで飛行機のエ
 ンジンを作っていたが、次第に材料が入らなくなり、生産は落ち込んでいった。

昭和19年12月に東南海地震*2があり、港区の永徳工場は埋め立て地で地盤
 が悪いため、大きな被害を受けた。

昭和20年6月9日、熱田工場がB29の爆撃^{ばくげき}により、わずか10分ほどで壊滅^{かいめつ}
 した。学徒動員をふくめ、2,000人以上の人が亡くなった。私は、安城の工
 場にいたため助かったが、そのまま熱田にいたら命はなかったかもしれない。

○ 勤務の様子

- ・休みは月に2日だけだった。給料は日給制で、1日1円だった。
- ・勤務は半月ごとに、日勤^{きん む}と夜勤^{にっ きん}を交代した。夜勤の時は、4kgぐらいやせる
 ほどえらかった。

*1 国民を強制的に動員して、兵役以外の一般の仕事につかせること。徴用の動員令状である「白紙」は、軍
 隊の召集令状である「赤紙」と並んで人々を恐れさせた

*2 1944年（昭和19年）12月7日に、紀伊半島南東沖を震源として発生した。マグニチュードは、
 7.9で、死者・行方不明者数は、1,223名とされる。この地震により、遠州灘沿岸（東海道）か
 ら紀伊半島にかけての一帯で被害が集中した。

・勤務時間は朝8時から夕方6時までの10時間で、毎日1時間か2時間の残業があった。

・欠勤には、厳しい指導が待っていた。2日以上欠勤すると、軍隊から派遣された監督官に取り調べを受けた。私は工場でのケガのため、3日休んだことがあった。仕事でのケガなのに、「たるんどる！」と叱られた。休んだ理由が、かぜや頭痛だったりすると、

「この大事なときに何をなまけておるのか。

緊張が足りん。」と軍刀でなぐられたり、青竹でたたかれたりした。軍刀のさやがへこんだことがあったり、失神した人もいた。ひどかった人は、半月ほど寝込んでしまった。

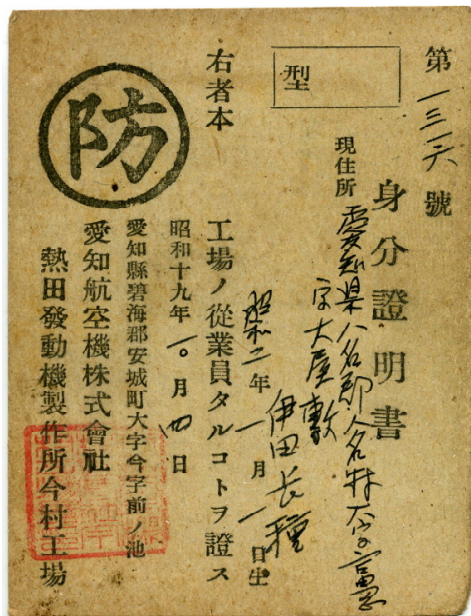
こんなありさまだったので、とても休みはとれる状況にはなかった。土日はなく、まさに当時の軍歌、「月月火水木金金」そのものだった。

安城勤務時の日課

5:00	自転車で新城へ
5:30	新城発
7:45	安城着
8:00	勤務開始
18:00	勤務終了
19:00	残業終了
21:30	新城着
22:00	自宅着

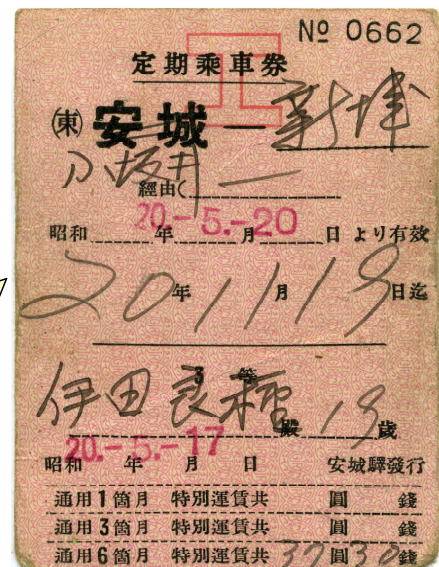
(日勤の場合)

伊田さんの身分証明書

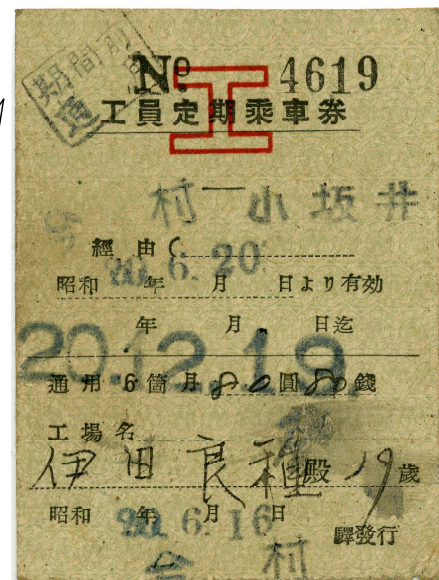


当時、この身分証明書がとても重要で、これがないと各種の証明や手続きができず、もちろん定期券も買えなかったそうです。

当時使用した国鉄の定期券
新城から小坂井までの半年
定期で
三十七円三十銭でした。



名鉄の半年定期券
今村は現在の新安城駅のこと
当時は、小坂井駅から伊奈駅を
名鉄が結んでいた。
(小坂井支線)



○ 怒部隊^{いかり}について

昭和19年末、アメリカ軍の上陸に備え、本土防衛のために編成された怒部隊が来て富岡に駐屯した。八名国民学校や車神社などに宿泊した。怒部隊は、富岡中部のお墓の近くの山で軍馬を20～30頭ぐらい飼っていた。馬のえさを得るために、私の家の畑を1反2畝（約12a）ほど借用し、エン麦やもろこし（こりゃん）を栽培した。終戦近くなると、当時の兵隊は物資に困り、いろいろな面で不自由していた。

- ・兵隊がわらぞうりを自分たちで作ってはいっていた。
- ・一部の兵士が腰につけている剣は、中味が竹でできていた。（銃剣にする刀）
- ・階級章（襟章）*1を作るために、ミシンを私の家に借りに来た。

こんな実態を目の当たりにして、口には出せないが、勝ち目はないと感じた。

○ 鋭敏部隊^{えいびん}について

20年4月、機甲部隊（戦車部隊）*2が満州を引きあげ、本土防衛のため、富岡に駐留した。この部隊には、3人の俳優がいた。徳大寺伸、永井達郎、小林桂樹の3人で、徳大寺伸は、当時の松竹映画の二枚目スター（今でいうイケメン）として有名だった。松竹の永井さん、大映の小林さんは、当時はまだあまり知られてはいなかった。永井さんの演技の先生だった徳大寺さんは、軍隊では永井さんより後輩だったので困っていたようだ。（徳大寺さんは☆一つの二等兵、永井さんは☆☆☆の上等兵だったので、永井さんが上官だった。）

鋭敏部隊は、20年10月まで駐屯し、解散する前に、お世話になったお礼にと、俳優さんたちが富岡で芝居を見せてくださった。また、終戦後に装甲車で新城まで子どもたちを乗せていってくれたりしたこともあった。

その後、小林桂樹さんは、平成17年5月11日、富岡のふるさと会館を訪れ、地元の人たちと語り合い、当時のことを懐かしんでおられた。残念ながら小林さんは、平成22年9月に亡くなられたばかりです。

○ 松根油^{しょうこん ゆ}*3について

私は八名青年学校卒業後、昭和18年9月に徴用されるまで、農業をしながら近所の作業所で松根油（テレビン油）を作っていた。場所は、家の近くの富岡大屋敷にあり、八名の松の根が集められた。航空燃料が不足するため、各村に割り当てられ、供出させられた。村内各地で掘り出し、集められた松の根（タイマツ）を細かくして大きな鉄釜で蒸して蒸留すると、油状の液体がとれる。それを新城の弁天橋の近くにあった精製工場へ荷車で運んだ。

安城への電車通勤の途中で見たことだが、岡崎で東海道の松並木の立派な松が

*1 軍服のえりにつけるもので、階級や所属などを表すために用いられた。

*2 戦車や装甲車などを装備した機動力のある陸軍の部隊。正式名は独立戦車第8旅団鋭敏第12051部隊

*3 松の根から採取した燃料のことで、エネルギー資源を断たれた日本が、航空機用燃料獲得のため日本中で松の根を掘り起こした。しかし、実際に燃料として使われたかどうかは、はっきりしていない。

掘りおこされているのを見かけた。掘っているのは、海軍の航空隊の兵士だった。こんなことをして戦争に勝てるのか、と内心思った。

○ 立ち向かえない日本の飛行機

岡崎の海軍飛行場では、空襲警報がある時には、なぜか1時間前に飛行機が飛び立った。飛行場には、ニセの練習用飛行機を置いた。敵機がその飛行機を攻撃すると、あとで喜んだという。こんな状況だから、日本の飛行機は、応戦のために飛び立つのではなく、待避するために飛び立ったようだ。

1時間ほどすると、決まって空襲があった。B29の編隊に立ち向かっていく日本の飛行機はなくなっていた。高射砲も届かず、全く刃が立たなかった。

監視哨*1が富岡にもあり、豊橋との境界に近い大原の南の山に置かれた。交代で情報をキャッチし、本部に知らせていたようだ。こういう連絡を受けて、飛行機を待避させていたのではないかと思う。ひどい話だが、ニセの飛行機で敵機を引きつけ、本物の飛行機は待避させたというのが実際のようなのだ。空中戦はほとんど見なかった。制空権をにぎられ、抵抗することもできない状況になっていた。

○ 小学校のこと

- ・新田に農場があり、し尿を運んだ覚えがある。桶にし尿を入れて、二人でこぼさないように、てんびんで運んだ。高等科の生徒が運んだが、学校から農場は遠くて大変だった。鼻をつまみながら運んだ。し尿はすべて、畑の肥として処理していた。
- ・お茶当番があり、学校の土手に植えてあるお茶の葉を摘んできて、火であぶり、大きな釜に入れてお茶をわかした。

○ 子どもたちへ

日本は技術はあったが、物資がなかった。アメリカの物量には勝てなかった。

私たちは、赤紙や白紙1枚で強制的に召集や徴用された。どこへ行かされるかは、一方的に決められた。軍需工場は、軍人や警察官の監督のもとで軍隊式の規律で支配されていた。不平や不満は言えず、意見を言うこともできなかった。すべてが国のためで、自分のためにはありえない時代だった。

自分の考えを自由に言えること、こんなすばらしい時代はない。二度と戦争をしてはなりません。



▲ 松根掘り作業（稲武町）昭和20年
（写真：東三河の100年より）

*1 監視哨とは太平洋戦争中に、本土空襲にそなえて各地につくられたもので、人が中に入り、人の目で敵機を見張るための見張り小屋のような施設のこと。